

密教と病

種村隆元（大正大学）

周知のように、前近代の社会において、病気は「魔物」が引き起こすものと考えられており、「病気の治療」は宗教実践における重要な位置を占めていた。それはインドにおいても例外ではない。密教においてこの「病気の治療」は重大関心事の一つであり、特に初期密教経典として分類される経典群には、数多くの病気治療のための修法（マントラや印などを使用したマジカルなもの）が説かれている。

インドにおいてヨーガタントラの根本経典とされる『真実摂経（初会金剛頂経）*Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*』は、真言宗における根本経典であり、『大日経 *Vairocanābhisaṃbodhi*』とともに、タントラ的（密教的）実践の到達点を覚りの獲得とした点で、それまでの密教経典、すなわち初期密教経典と一線を画すると考えられている。しかしながら、その考え方の背後には「純密と雑密」といった真言教学的視点があり、実際のところ、『真実摂経』にはさまざまなマジカルな修法を駆使した、病気治療などの現世利益的な実践が規定されている。

また『真実摂経』は、タントラ宗教の発展史の視点から見た場合、シャクタ的シヴァ教（Śakta-Śaivism）の実践・用語の影響が顕著に見られる経典であることが指摘され

ている。『真実摂経』に見られるシャクタ的シヴァ教の影響として挙げられるものの一つにアーヴェーシャ (āveśa 憑依) がある。アーヴェーシャは『真実摂経』の実践の中核を占め、灌頂 (abhiṣeka) と呼ばれる入門儀礼において、入門希望者はアーヴェーシャの状態に入ることが求められ、また実践者が様々な実践を行う際に自らにアーヴェーシャの状態を引き起こすことが説かれている。

本発表では、『真実摂経』に説かれるアーヴェーシャが「病気払い」の実践にどのように適応されているのかを、経典本文、註釈書などの関連文献を読み解くことで、密教における「病気払い」の一例を検討するとともに、病気治療などの現世利益的な実践がインドの密教史を通じて重要なテーマであったことを論じてみたい。

<キーワード：密教，病気，現世利益>